

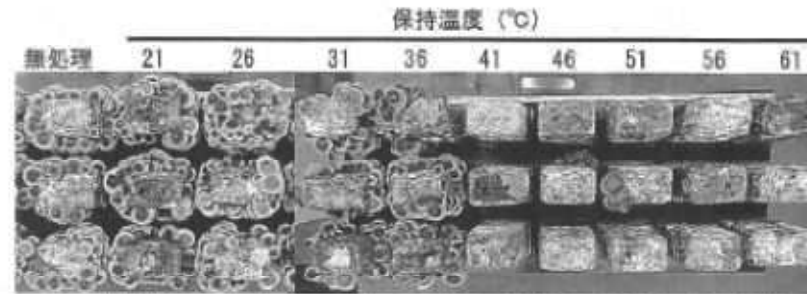
県森林研究所

県森林研究所（美濃市曾代）は、シイタケを栽培する菌床が41度以上の高温状態になると、発生量が大幅に低下することを明らかにした。県内では夏場の酷暑による高温障害で生産にマイナス影響が出ており、研究成果を気候変動に対応した生産管理に役立ててもらう。

研究所によると、菌床を高温下に置くことは避けるべきとされるが、基準となる温度は明確にはなかった。農家から近年、発生初期の収穫量減少や収穫の遅れなど高温障害に関する声が多く寄せられたため、おくみの菌床生産組合（郡上市白鳥町）の協力

菌床発生量、41度超で激減

シイタケ栽培、高温障害の温度特定



高温状態になるとシイタケの発生量が低下することを示す研究結果（県森林研究所提供）

を得て影響が出る温度を調べた。研究では、菌床を（ま）ま

な温度下に置いて菌糸の成長やシイタケの発生量を調べた。その結果、35〜36度の状態が5日間以上続くと、シイタケが発生しなくなった。さらに41度以上の状態が15分間続いただけで発生量が著しく減少。温度に加え、その温度が続く時間が影響することが分かった。

研究所は、研究成果を踏まえて散水や換気などの高温対策を行い、施設内の温度管理をするよう農家への周知を図っていく考え。主任専門研究員の上辻久敏さんは「施設外においても、菌床の培養棟から移動させる8月は高温の外気にさらされる可能性がある。短時間であっても発生量が落ちる」と注意を呼びかける。

（青山和史）